

◆ 書 評 ◆

除本理史・佐無田光『きみのまちに未来はあるか？
—「根っこ」から地域をつくる』岩波書店，2020年

八 木 信 一（九州大学）

とある文章のなかで、岩波ジュニア新書が「あなどれない本」として紹介されていたことを、記憶している。若い世代を対象とした入門書だからこそ、与えるインパクトは計り知れないものがある。書評者が経済学へ「文転」した経緯のなかでも、岸本重陳先生の『経済のしくみ 100 話』や『新聞の読みかた』との出会いがあった。また、宮島洋先生の『税のしくみ』や神野直彦先生の『財政学のしくみがわかる本』は、高校生までの間に触れることができる、貴重な財政学の入門書である。本書も、まちづくりを中心とした地域分野に関する重要な一冊として、そのなかに加えられることになるだろう。

序章（私たちは「地域」とどう向きあうのか）では、地域を取り囲む時代の変化に着目し、「ローカル志向」や「田園回帰」を例とした生き方や働き方の変化のなかで、地域との接点が増えてきている一方で、地域の一部を商品化し、それらを消費させることで利潤を生み出していき、「消費される地域」の行き過ぎも起こっていることが指摘される。このうち、後者の弊害を避けるためには、「本物」を住民自身が学習によって見分け、また見つめ直すことが大切であるとする。

第1章から第4章は、著者たちがこれまで調査研究等を通して向き合ってきた様々な現場から、「住民間のつながり（コミュニティ）、土地・自然、まちなみ・景観、伝統・文化など、（中略）いずれも住民の暮らしが長年積み重ねられてきた結果として形成されてきたもの」（vii～viiiページ）である、地域の「根っこ」を多面的に深堀りしている。

第1章（暮らしの「根っこ」を見つめなおす）では、原発事故の被災地である福島県飯舘村が取り上げられる。飯舘村では、石油危

機や大冷害を経て、1980年代から特徴ある村づくりが始まり、飯舘牛やそれを含めた村全体の地域ブランド化が進められてきた。またこれらの取組の担い手づくりでは、自主的な住民組織が大きな役割を果たしてきた。このような住民自治を重視した村づくりをさらに発展させるために、「平成の大合併」から離脱した後は、村の女性による起業への取組も本格化させてきた。その1つとしてカフェ「極久里」の挑戦が描かれるが、原発事故による「空間の履歴」の喪失がいかにかい大きいものであったのかが、読者に伝わるであろう。

第2章（ふるさと・地域を再生していこう）では、熊本県水俣市が取り上げられる。水俣病の被害者救済だけでなく、「チッソがあってこそ水俣」（53ページ）では、住民の間での対立を乗り越えて地域を再生させることも、大きな難題として抱えてきた。そのなかで、「もやい直し」が1つの転機となった。著者らは、もやい直しの重要な意義を、「水俣病問題を地域固有の『価値』にとらえなおし、まちづくりの前面に押し出すことによって、住民のなかの亀裂を修復しようとした」（57ページ）ことにあるとしている。そしてこの意義をくみとり、根っこを見つめ直す取組として、地元学、修学（教育）旅行誘致、さらに甘夏の有機栽培と商品化に携わる「ガイアみなまた」が、それぞれ紹介される。

第3章（「根っこ」を活かしてまちの文化をつくろう）は、石川県金沢市が取り上げられる。まず、「内発的な地域経済システム」、「重層的な地域コミュニティ」、および「伝統・文化の都市アメニティ」によって構成される内発的発展が根っことなり、まちの雰囲気、風格、美意識などの地域らしさが形づくられてきたことが述べられる。そのような地域ら

しさの存在は、時代の変化のなかで求められる変容を難しくもしてきたが、金沢21世紀美術館が大きな転機となり、伝統工芸の枠に留まらない新たなU・Iターン者や、地元の経済団体から派生したNPO「趣都金澤」による多彩な文化まちづくりを生み出してきたことが紹介される。しかし、金沢までの北陸新幹線の開通を受けて、文化価値の商業化を伴う観光化が進むなかで、まちの文化の根っこを培ってきた共同性を崩しかねない、「金沢シンドローム」が起きていることが述べられる。

同じく石川県内であるが、第4章（過疎からの最先端）では過疎化が進んできた奥能登が取り上げられる。かつては船による交易で栄え、また高度成長期以降では観光業、建設業、および製造業などが、この地の兼業農家モデルを支えてきた。だが、バブル崩壊によってそのような多就業の生活スタイルが大きく崩れ、やがて長い間、原発計画のくびきから逃れられなくなった。能登空港の開港などが気運となって、地域の価値を見つめ直すための学びの場を、金沢大学が地元自治体や地域コミュニティと丁寧に連携しながら提供してきたことが、やがて新たな流れをつくり出すこととなる。各種プログラムを重ねていくなかで、里山ビジネスとその担い手が生まれてきたこと、さらにそこに見出せる多就業の生活スタイルの土台には支えあいの人的ネットワークがあることが、それぞれ述べられる。また章の最後には、奥能登国際芸術祭を通して、地域の価値をめぐる「ライトな消費者」との向き合い方についても触れられている。

第5章（「根っこ」から地域をつくる）では、それまでの章の内容を踏まえて、根っこと地域の価値との関係が論じられる。著者たちは、モノづくりから無形の要素が多くを占めるコトづくり（ストーリーの生産）へ、さらに開発方式をめぐるスクラップ・アンド・ビルドからリノベーションへの転換がそれぞれ起こるなかで、暮らしの豊かさを支える根っこの意味を再評価し、地域の資源を見出すこと、そしてそれらを通して地域の価値をつくろうとしている運動として、地域おこしやまちづ

くりを捉える。そのうえで、そこでは誰が、どのような意味づけを伴いながら、地域の価値をつくっていくのかが問われるとしている。本章の後半に指摘されている、飯舘村や水俣市を例とした「負のできごと」に対する意味づけの難しさや、リスク社会に求められるレジリエンスの基本に、共感をベースとしたコミュニティの自治力があることは、それぞれ傾聴すべき指摘である。

終章（未来へのヒントを地域のなかに探る）は、ポスト資本主義という変化の方向性を踏まえて、地域から未来へのヒントを探るためのまとめの章である。フローからストックへ、そしてモノの個人所有からシェアリング経済へという経済システムの転換を振り出しに、そのなかで進むことが予想される多業的な働き方や、社会的企業の台頭とこれらの企業が担う事業に対する投資環境の整備、さらには地域の論点により深く関わる地域プラットフォームの設計、地域の実情のあった仕事のスキルを身に着けるための教育・訓練制度の構築、および課題解決のためのプロジェクト現場における直接的な参加や意思決定を支えるガバナンスの模索に至るまで、過不足なくまとめられている。

ここまでの各章の紹介で、指定された字数の多くを費やさなければならないほど、本書はジュニア新書の一冊ではありながらも内容豊富であり、なおかつ奥深い。現状において抱えている課題や可能性を踏まえて、地方から「維持可能な発展」をどのように実現していくのか、地に足のついた見方や考え方を涵養するためには、最良の入門書の1つであると言える。またそうであるがゆえに、書評すべき論点も多岐にわたるが、以下では本書における主要概念である、「根っこ」と「地域の価値」にしばって取り上げたい。

まず、根っこにかかる論点として、地域プラットフォームを取り上げる。本書では、地域プラットフォームを「多様な人びとが、地域ビジネスをおこしたり、まちづくり事業を展開したりするための共通の基盤」（183ページ）としているが、このなかで（またはこれと関連して）行政と深い関係性を持ちなが

らコミュニティによるまちづくりを担ってきた、既存の地縁団体や公民館はどのように位置づけ、今後いかなる役割を与えていけばよいのであろうか。

少子高齢化が進むなかで地縁団体の機能が低下し、また社会教育から生涯学習への流れを受けて公民館の役割も変容するなかで、地縁団体については地域自治組織（あるいは地域運営組織）へ、また公民館については教育委員会管轄から首長直轄へとそれぞれ「政策化」されてきている。このような動きは、課題解決型のまちづくりへの展開という点では、地域プラットフォームと親和的であるようにも見える。しかし、政策化の過程において地方自治体が強く関与した結果として、住民の当事者性が低下してしまうという問題を抱えている地域も存在している。地域プラットフォームの考え方や各地での実践が、根っこを構成するコミュニティが抱えている課題にどれほど応えることができているのか、より深掘りしていく必要がある。

次に、地域の価値にかかる論点として、固有性と関係性を上げる。既述したように、本書では住民の暮らしが長年積み重ねられた結果として形成されてきたものを、根っこと呼んでいる。このことから、根っこを踏まえ

た地域の価値には、地域の固有性が反映されているところが多い。既述したように、本書のなかでも、地域「固有」の価値と記されている箇所がある。他方で、これも本書における重要な指摘であるが、第5章では地域の価値の生産には分業があり、それらの価値を生み出す資源が地域にあるだけでなく、それらを意味づける工程を内発的に作りだせるかどうか問われるとしている。つまり、地域の価値の生産においては、他地域との関係性も問われることになる。

とくに、その後すぐに付言されているように、意味づけを担う事業者は現状では圧倒的に首都圏に集中している。このことは、「よそ者」によって地域の価値が見直される契機になる一方で、都合のよいかたちで地域の価値が輪切りにされてしまう危うさを抱えていることも意味する。それゆえ、地域の価値をめぐっては固有性を中心に据えながらも、それらの固有性に良いかたちで「揺らぎ」を与える関係性を、どのように地域から内発的に創っていくのかが問われているのではないだろうか。そしてこの問いこそが、地域からの「価値共創」の出発点であり、また最前線でもあることを、私たちは本書を通してしっかり認識したい。